

編集室から

以前から度々申し上げておりますが、最近、四季がなくなっているように感じています。うららかな春と、心静かに整える秋。春と夏の間にあった梅雨もそうかも知れません。かつてはしとしとと降っていたはずの梅雨が、今では熱帯のスコールのような叩きつける雨になり、風情も何も失われました。

年間降雨雪日数が170日を超え、二日に一度雨か雪が降る街だった金沢でも、晴天が増えているように感じています。列島でも、六月中に梅雨が開けてしまい、真夏日・猛暑日がいきなり始まっています。

酷暑日とは、気温が40度を超える日とされているようですが、体温とおなじ37度を超える日を酷暑日とした方が、体調管理的にはふさわしいのではないかと考えています。

早めに梅雨があけるということは、このような猛暑・酷暑が、より長く続くことになります。猛暑でも、戸外での仕事をせざるを得ない一次産業、集配達業、土木工事などに従事される方々は、大変な思いをされているに違いありません。お勤め、ありがとうございます。

熱中症に対抗できる身体づくりをするなら、汗をかく体質にすることなのだそうです。これは都市的生活では嫌われるもので、逆に汗をかかないことが好まれています。ところが、汗は、身体の調子を整えるために体温を下げる重要な役割がありますので、必要なときに汗をかけないでいると、体温調節ができず、熱中症に陥りやすくなってしまいます。

汗をかきやすくなるには、運動と熱めのお風呂に浸かること、と聞きました。仕事柄と嗜好的に運動は苦手なので、せめてお風呂の温度を高めに設定し、半身浴をするよう、心がけるようにしています。皆様も、どうぞご自愛の上、猛暑を乗り越えてくださいませ。(は)



このニュースは、地域計画に携わる若手の技術者の参考となることを目的に発行を始めました。

その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2025/07

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2025/07

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

文 月



和歌山県有田川町にて
あらぎ島
by hama

**復興するぞ！
能登・北陸**

前回までの話で、何を悠長なことを…と思われた方もいるでしょう。しかしリバウンドしない体重減少の達成とは、それくらい難しいことです。最後に、減量がうまくいっている方々に共通する事柄が何かを考えてみて、このシリーズを締めくくりたいと思います。

◎

強い意志を持って自分の力だけで減量を維持できるような方は、クリニックに来られたりはありません。我々が診させていたくのは、色々と試みたけれどもうまくいかなかったという方ばかりです。そんな中で成否を予見できるポイントがあるとすれば、それは「何とかしたい」という想いの深さのように思います。家族や知人に促されて来ましたという方や、手っ取り早く痩せたいと思っているという方は、当然ながら難しいです。体重を減らすためには、特別な方法も魔法の言葉も有りません。生活習慣の問題を見つけて出し、改善が習慣として定着するまで継続する、その積み重ねです。そうした地道な作業に耐える、想いの深さが必要だと感じます。

◎

もう一つ、うまくいっている方は「自然に痩せている」「勝手に体重が減っている」という言い方をされることが多いです。そもそも数字の目

標を立てても思うように行かないことがほとんどですし、そうなるとヤル気も削がれてしまいます。我々が一律にお勧めするのは、毎朝体重を測定することだけです。それも目標を立てるのではなく、上限だけ決めて超えていなければ「ヨシヨシ、うまくやれている」と考えていただくように繰り返し言っています。毎朝体重を測っていれば、万が一上限を超えていても少し頑張れば翌朝には元に戻すことができます。数日放置して脂肪に変わってしまった、なかなか減るものではありません。考えなくても自然にやっている朝のルーティンに体重測定を組み込むことができれば、一生の財産になります。そうして増えないような歯止めを作っておけば、あとは善い習慣が一つ一つ身に付いていきさえすれば勝手に体重は減少に向かいます。「努力」や「我慢」ではなく「自然」になって初めて、習慣が身に付いたと言えるようです。

◎

それでも、その後も山あり谷ありますが、一応の成功体験として自信には繋がります。こうした外来診療を私達は日々続けています。これで体重の話は一段落にしたいと思います。



【プロフィール】
（いがき としお）金沢大学北潟寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とっても怖かった…。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松で又ク又クしています。

濱の起業塾 七十五『リスク対策⑱』

ブランド品が大好きな日本人は、その割に何故か、ブランド創造・ブランド構築には疎く、ましてブランドの維持管理には無頓着であるような気がしてならない。前号の本欄末尾で、ブランド構築とブランドマネジメント（維持管理）は、表裏一体と考えるべきであることを記したが、今回は、もう少し掘り下げて考えてみたい。

◎Y社問題

二十年、Y乳業（現在は、別会社に統合）の低脂肪乳を飲んだ消費者が嘔吐や下痢などを起こした集団食中毒事件。スーパーなどからY社商品が撤去されるなど、ブランドイメージを大きく損ねる事件だったが、その翌々年には子会社のY食品がBのM（狂牛病）にかかった牛肉を国産牛と偽って販売したというグループ拳げの問題。

◎

事件の深層については、別な情報源をあたっていただきたいが、ここではブランドマネジメントの点からのみ、考察したい。

Y社は、大正期の創業で、事件当時、巨大総合乳食品メーカーに成長していた。創業期から相当な企業努力によって、当時の地位を築き上げてきたに違いないことだ

ろう。

昭和三十年にも、製造過程での杜撰な管理から、食中毒事件を起こしたが、この時は迅速かつ丁寧なリスクマネジメントによる対応を行い、最小限のイメージ低下で抑えている。

問題は、この四十五年間で、リスクマネジメントの質自体が伝承されず、失われていたと思われることである。まして、昭和期から格段に上がった社会規範へ適応するためのリスクマネジメントの質的更新は、果たしてなされていたのだろうか。

社会課題解決事業を始めとして、どのような事業においても、創業時の理念・志・哲学は、その事業の存在価値そのものである。ところが、二代、三代と代わるに従い、その価値観の継承が困難になっていく。まして、社会情勢や規範も変わり、それに従って現場のオペレーションも進化し続けなくてはならないが、現場は日々の活動で多忙を極め、コナシに陥りやすい。

事業の統合管理者は、チーム内への理念の浸透と担当業務への誇りの醸成に並行して、社会情勢の変化を注視して、マネジメントの質的更新という二つの面を同時に達成する必要がある。その自覚を持ってない者に、事業経営・統括を担う資格はないと、考えるが、いかがだろうか。

年齢によって興味関心は変わる。御多分に洩れず、若い時はそれほど興味のなかった歴史・文化に、還暦に近づいた私も吸い寄せられるようになってきた。神社仏閣は、よくある構図で写真撮って終わりではなく、解説を読み隅々まで回るようになった。あまり足の向かなかった美術館や博物館へ出かけるようになった。

そんなとき、大阪・関西万博の関連企画として、先月中旬まで関西の3つの博物館で国宝展が行われた。普段はバラバラに展示されているお宝が集合するのだ。行かないわけにはいかない。残念ながら全館制覇とはいかなかったが、なんとか都合をつけて2館を巡ることができた。

まず、京都国立博物館の特別展「日本、美のるつぼー異文化交流の軌跡ー」。国宝がずらりと並ぶなか、私のお目当ては、俵屋宗達「風神雷神図屏風」、葛飾北斎「富嶽三十六景 凱風快晴」、「同 神奈川沖浪裏」。いずれも、子どもの頃は教科書で、大人になってからは様々な機会で見える有名な超一級の文化財である。相対すると、繊細かつ大胆な構図と、鮮やかな配色が目飛び込んでくる。どれも静止画であるが、躍動感に富み今にも動き出しそう。それでいて不安定感はなく、どっしりとした構えで見るものを圧倒する。

次に、奈良国立博物館の特別展「超 国宝一祈りのかがやきー」。こちらでは、仏像が多くの空間を占め、なかでも「観音菩薩立像（百済観音）」、「菩薩半跏像（伝如意輪観音）」が目玉である。絵画の方が華やかかもしれないが、仏像には場を支配する力がある。姿勢、目線、指先。展示の工夫も含めて、仏の息づかいが聞こえてきそう。科学が発達した現代においても、静的な仏像の持つ不思議な力を感じざるを得ない。

我が国の文化財の頂点に立つ国宝。短期間にその多くへ接することができ、本物の迫力をまざまざと見せつけられ、間違いなく目の肥やしとなった。今後も機会をつかみ、国や地域の歴史・文化を学び、しっかりと体感し焼き付け、心の肥やしにしていきたい。

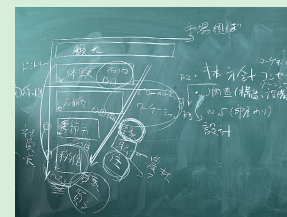
当地域における地域再生マネージャー事業「清水地域ランドスケープ再生戦略事業」においては、「公営温浴施設の再整備」と隣接集落への「公園整備を起点としたまちづくり」、そして現在弊社が運営する「移住ドミトリー」の整備、この3つが当事業の主な柱でした（行政的には）。しかし一個人としては、当地域の今後を左右するのは、この時点では未だ構想段階に過ぎなかった「移住ドミトリー」を運営する新しい法人であろうと思っていました。

施設全体のレイアウトや部屋数、持たせる機能など、施設としての設計・検討はもちろんですが、単なる“賄い付き共同社員寮”（単なるハコモノ）にとどまらない、移住や就業・就農、地域再生に繋げる新法人の役割や体制づくりがまず重要。アドバイザーのお二人と地域事業者二者のミーティングは、オフライン／オンラインを含め20回を超え、これらを含めた地域側の自主的な協議は100回を超えたと聞いています。

アドバイザーを交えたミーティングの場には私たち役場側も同席しましたが、極力余計な口出しはせず、地域の自立を促す意味も含め主導権は地域事業者側に委ねました。ただその場では、時折アドバイザー・濱さんから送られてくる視線・眼力を感じることがしばしばありました。本寄稿の初回にも「現地で見た厳しい表情」と書きましたが、当事業のミーティング中に送られてくるその視線は、『（新法人の運営は）お前がやれ』という無言の圧力（？）のように感じました（未確認情報）。

また、これらすべての事業については、毎定例会ごとに議会のみなさまにも、叱咤激励を受けながら進捗状況を報告するよう努めました。そこで困るのが、ソフト事業の進捗や成果をいかに伝えるか。ハード事業をはじめ成果物が見える事業は比較的説明しやすいんですが、この地域再生マネージャー事業自体は全くのソフト事業。目に見える成果物といえば、年度末に上がってくるアドバイザーからの報告書くらいなものです。そこで、とある議員さんに言われました。「報告書の内容は分かった。それより課長自身の考えを聞かせてくれ」

そして後日、自分の意見を書面にまとめて報告することになります。その内容は私見を多く含み、少しばかり突っ込んだものでした。「書いてあるとおりやな。やれるんはアンタしかおらんわ」 ご本人はもう覚えていらっしゃるかもしれませんが、先の濱さんの視線とともに、私自身の先行きを示唆するきっかけとなりました（脳内での誤変換かもしれませんが（笑））。



人吉市役所に勤める友人、溝口尚也氏がこのたび副市長に就任された。人吉といえば、2020年7月の未曾有の水害が記憶にある。球磨川が氾濫し、市街地の多くが水に浸かったあの日から、早くも5年が経つ。復興が一段落しつつある今、尚也氏(同性なので名前を常と呼んでいる。ちなみに溝口氏は由布院に特に多いが、熊本、鹿児島県でもポピュラーだ)の就任を機に、四度目となる人吉を訪ねてみようと思い立った。職務の苦勞の多い中、課題解決に実現性のある提案をしようと考えていた。

5月22日、羽田から鹿児島空港へ飛んだ。人吉市は熊本県に位置するが、アクセスは鹿児島空港の方が便利だ。空港から高速バスに乗り50分程揺られて人吉インター着。そこには尚也氏が迎えに来てくれていた。さっそく再会を喜びつつ、人吉の案内が始まった。

まずは腹ごしらえにと、「手打ちの達善」へ。十割そば、信州の蕎麦粉はもとより九州産の蕎麦粉を使いミシュラン掲載されている。お待たせすることになると言われたが、我慢の限界の中には納まった。沖縄の塩、天城のワサビ、つゆももちろん美味しい。主の「気」が十分に伝わってくる蕎麦であった。

食後は街の視察へ。人吉といえば「球磨川」、大氾濫を起こしたがこの川が無ければ人吉ではない。この川の観光拠点「HASSENBA」をまずは案内された。球磨川くだり(株)が豪雨の被災後、100年以上の歴史を持つ



「球磨川くだり」の発船場のリノベーション工事を行い、「ツアーデスク」「カフェ」「ショップ」の機能を兼ね備えた観光拠点施設『HASSENBA HITOYOSHI KUMAGAWA』として開業したもの。水害時に達した水位3.5mの線が壁面に記されている。デザインセンスは秀逸。ぼんやり川の流れを目にしつつ時を過ごすこともできる。すぐそばに整備途中の感がぬぐえない公園がある。さて、これをどうする？

住宅が近くにあるためか、建築物はなるべく建てて欲しくないとのこと。ならば芝生広場かな、

一部に大屋根テントがあるといい、境町にあるニコニコパークのような。「HASSENBA」でミニテント貸出しがあれば、過ごす時間も長くなる。名古屋のセントラルパークでその光景を見たことがある。川へのアプローチも設計に組み込みたい。公園整備と共に稼ぐ仕組みを入れての管理運営を「HASSENBA」がするといいよねと副市長に話した。

市街地は水害の爪痕はなお深く、仮設店舗やイベント広場が設けられ、復興住宅も点在しているが、街の各所に空き地が目立つ。飲食店以外の商業施設の立地は難しく、住宅以外にないのではと思う。一条工務店が水害対応の住宅を開発しているので、ここと連携した「地域優良賃貸住宅」の建設はありかな、しかもPFIでと副市長に話した。(つづく)

